

平安京郊外の別業における地形圍繞の景観特性に関する研究*

Landscape Character by Landform Enclosing in Villas in the suburbs of Heian-kyo

山口敬太**・出村嘉史***・川崎雅史****

By Keita YAMAGUCHI**・Yoshihumi DEMURA***・Masashi KAWASAKI****

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

現在の京都に残っている名勝や庭園の立地を見ると、その多くが、もとは平安時代に造営された別業の地であったことがわかる。別業とは、平安貴族たちが、平安京内の住まいとは別に、自然との接触を楽しむために平安京の郊外に構えた別荘である。これら別業の地は、後に庭園文化、風景文化が開花する場所として、非常に重要な意味を持つ。これらの地の地形条件と景観特性を概観すれば、どれも地形による圍繞性が強く、あたかもこのような地勢を好んで選んだかのようなのである。

本研究では、平安京郊外の別業を対象として、地形による圍繞性が、別業の立地要因の一つであったという仮説を検証するために、地形圍繞の景観特性を明らかにすることを目的とする。

対象とする別業は、『平安京提要』¹⁾をもとに、立地が特定できた平安京郊外の15の別業を選定した。平安京周辺の貴族の別業と、平安京内の有名な庭園の立地を図1に示す。これらの別業から、地形圍繞がどのように認識されていたかを、文献資料の分析を通して明らかにし、その結果をふまえて、物理的な地形圍繞の景観特性の評価を行う。

(2) 研究の位置づけ

本研究の視点として、第一に、別業の立地から見た景観をGISを用いて再現し、仰角と可視範囲の分析から、地形による圍繞性を評価する点が特徴である。これまで、地形構造によって生じた空間特性については、樋口²⁾によって多くの蓄積がなされた。その後も、地形図を用いて地形圍繞による領域空間の規模を求めた斎藤らの研究³⁾や、今野らの研究⁴⁾などの蓄積があり参考になる。しかし、圍繞された内部からの視点を再現した上で、その景観特性を論じた研究はほとんどない。また、山による圍繞性を仰角を用いて十分に考察した研究もみられない。

第二の視点として、これまでの平安時代の別業の空間に関する研究は、主に庭園史や建築史の枠組みの中で、庭園や建築物の敷地内部のみに限られて行われてきた。しかし、敷地から見える周囲の山を取り除いてこれらの景観を語ることは出来ない。本研究は、むしろ周囲の山がつくり出す広域的な景観の特性に着目し、山・地形がつくる空間特性に着目した、景域という視点で捉え直す。本研究は、以上に述べた二点において、新規性がある。

2. 文献資料にみる別業周辺の地勢に対する認識

別業の地は、人々が山水の面影を感じ、詩を賦し、和歌を詠む、文芸の中心となる場所であった。詠んだ内容は、四方の山並みや地勢の幽深さ、身近な自然の景物などであった。この別業において、地形圍繞がどのように認識されていたかを、和歌や漢詩などの文学作品や、当時書かれた文献資料の分析を通して明らかにした。その結果から、主なものを整理してここに挙げる。

当時の文学作品には、別業から周囲の山並みを詠んだ歌や漢詩が数多く見られた。例えば、宇治の源融別業(⑦)は、『本朝文粹』⁵⁾に、川を挟んで四方を山に囲まれた「勝境」であると書かれた。また、源氏物語の「権本」⁶⁾には「野山のけしき」と「木の葉の音」「水の響き」「滝」が一緒のように分からなくなって、と、周囲を取り囲む山や川の景色と、庭園の景色を同時に眺めている。ここでは、敷地の内(庭園)と外(山・川)で明確な境界がなく、一体化していた様子が読み取れる。平安貴族らは、別業を取り囲む山並みを眺め、その山並みが作る広大な景観を楽しんでいた。

文献には、周囲の山並みと同様に、松・竹・柳や、鳥の声、花の香りなど、テクスチャ景観や、五感で感じる身近な景色を楽しんだ記述⁷⁾や、眺望を楽しんだ記述が見られた。仲資王別業(⑩)においては、「山の気色さへおもしろく、都はなれて眺望そひたれば、いはんかたなくめでたし⁸⁾」とあり、身近な山の気色と同時に、中・遠距離の眺望を楽しむことができた。別業では、このような優れた視点場領域を形成していたことが推測される。

平安貴族らは、別業周辺の山や景物に取り囲まれた空間を、都とは異なる一つの場所として意識していた。例えば、嵯峨院(①)で詠まれた漢詩には、「地勢幽深」のように周囲の奥深い地勢を詠み、そこが京中の俗塵とは

*キーワード：景観、空間整備・設計

**学生員，工修，京都大学大学院工学研究科

(京都府京都市西京区京大桂4 C1-1, TEL075-383-3329,

Keita.Yamaguchi@t23x1791.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)

***正員，工博，京都大学大学院工学研究科

(TEL075-383-3328, demu@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)

****正員，工博，京都大学大学院工学研究科

(TEL075-383-3327, kawa@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)

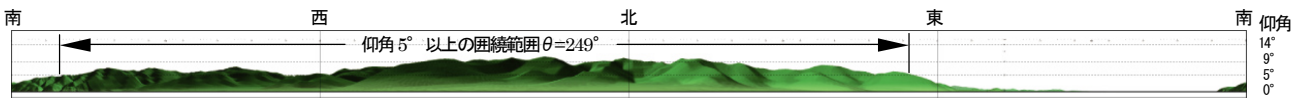
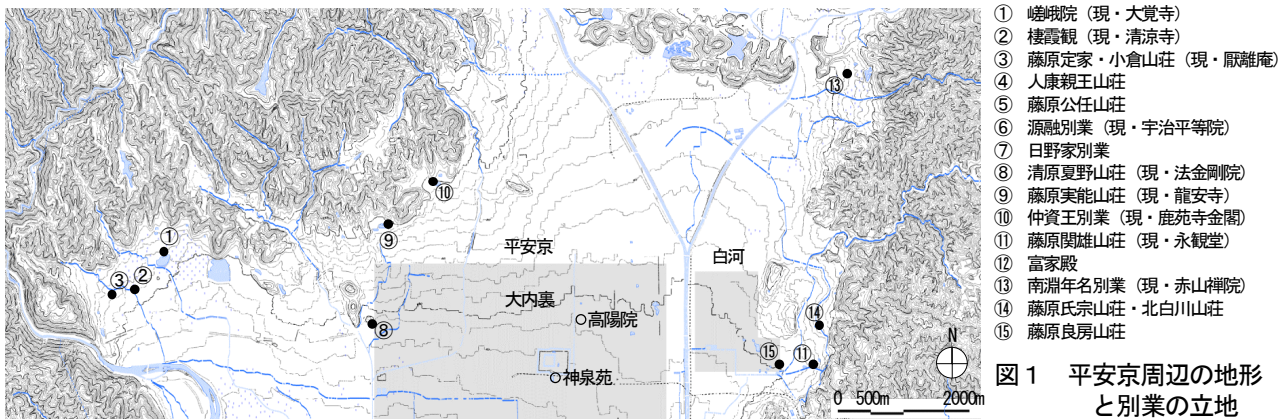


図2 地形モデルを用いた360°方向の展望図(例:嵯峨院)

無縁であることを賞賛している。ここでは、地形圍繞による領域感覚を得ながら、周囲の景物を愛でたのだろう。

さらに、宇治や嵯峨、小野などの別業の地は、「山里」と呼ばれた。山里は、「都」に対する仙境としてのイメージにもとづいて、寂寥・孤独の地として、憂き世からの逃避先として、文人貴族の趣味的な隠遁生活の場として、捉えられた⁹⁾。例えば、栗田の山荘(⑮)を訪ねた藤原公任は、「浮き世をば峰の霞やへだつらむなほ山里はすみよかりけり(千載和歌集)」と、峰(と霞)によって京中とは隔てられた、住みよい「山里」の境地を歌にしている。ここでは、別業(山里)が、都と遠く離れた地であることを実感するために、視界を遮る山や岡などの地形は、都と山里を分ける境界として認識されていた。ここでは、地形圍繞を境界として、その内部に生まれた一つの区切られた領域を、山里と認識していたと考えられる。

以上のように、文献資料の分析から、別業周辺の地勢に対する認識を調べた結果、主に3つの見方があることが分かった。それは、①視対象となる山に囲まれること、②地形圍繞によって閉鎖的な領域が生じていること、③眺望が良いこと、であった。平安京郊外の別業は自然への回帰をはじめからはらんだものとして営まれたと考えられている¹⁰⁾。そうすると、別業の立地選定においては、これらの地勢に対する見方で、好ましい地勢条件を満たす場所を選んだ可能性が考えられる。

3. 別業における地形圍繞の定量的把握

前章から、別業造営における地勢条件として、①山による圍繞性、②空間の閉鎖性、③眺望の良さ、の3つの評価項目が浮かび上がった。本節では、これらをもとに、地形による圍繞性を具体的に検証していく。そこで、別業の立地地点から見た景観を再現するために、国土地理院発行の標高データ「数値地図50m(標高)」と「数

値地図50m(標高)」をもとに、「カシミール」を用いて、3次元地形モデルを作成する。作成した地形モデル上で、別業の立地地点を視点場とした周囲の景観を、360°カメラで撮影し、展望図を出力し(例:嵯峨院からみた展望図、図2)これを分析に用いる。

(1) 仰角を用いた圍繞感の把握

視対象となる山に囲まれること(山による圍繞性)を定量的に把握するために、出力した展望図の四方の仰角を計測することとした。山による圍繞については、その距離・規模の大きさから、広場や街路などの圍繞感を測る指標であるD/Hを用いるのは適当でない¹¹⁾と判断した。山として意識され始める仰角は5°以上¹¹⁾とされている。この仰角5°をこえる山によって囲まれる水平角度 θ を圍繞範囲とし、山にどの程度囲まれているかを測定した。同様に、視対象となる山が見える範囲(仰角9°以上)を角度 ϕ で表し、これを測定した。

この結果を表に整理したのが図3である。視対象として意識される山の範囲(θ)が、神泉苑などの平安京内の庭園では約0~2°なのに比べて、平安京別業では全ての場所で140~240°の範囲に分布した。 ϕ も約60~150°ほどと、水平方向の静視野が約60°、閉鎖性感覚が始まる空間視野が約90°¹²⁾であることを考えると、視山によって囲まれている感覚は強かったと考えられる。

(2) 可視範囲からみた圍繞による空間の閉鎖性

地形圍繞によって閉鎖的空間が生じていたかどうかを示すために、地形モデル上で可視領域分析を行い、可視領域の閉鎖性とその規模についての考察を行う。閉鎖された空間の規模を計測するために、仰角5°以上の範囲のみに限って、可視範囲の面積をカシミールを用いて計測し、その面積Sから、圍繞の境界までの平均距離L

($L = \sqrt{360S/\pi\theta}$)を計算する。この結果は図4のようになる。この分布には、ばらつきがあり、平均前後と、500m前後の狭域の圍繞、1.8km前後の広域の圍繞の、

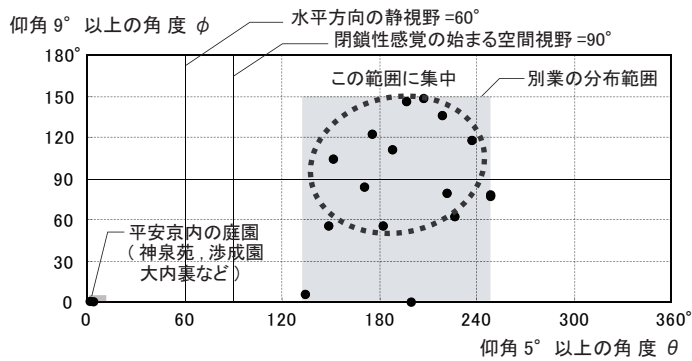


図3 仰角別にみた山並みの圍繞度

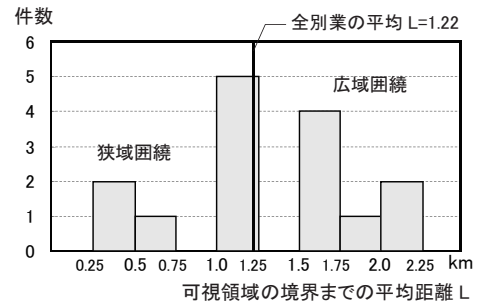


図4 圍繞された領域の規模の分布

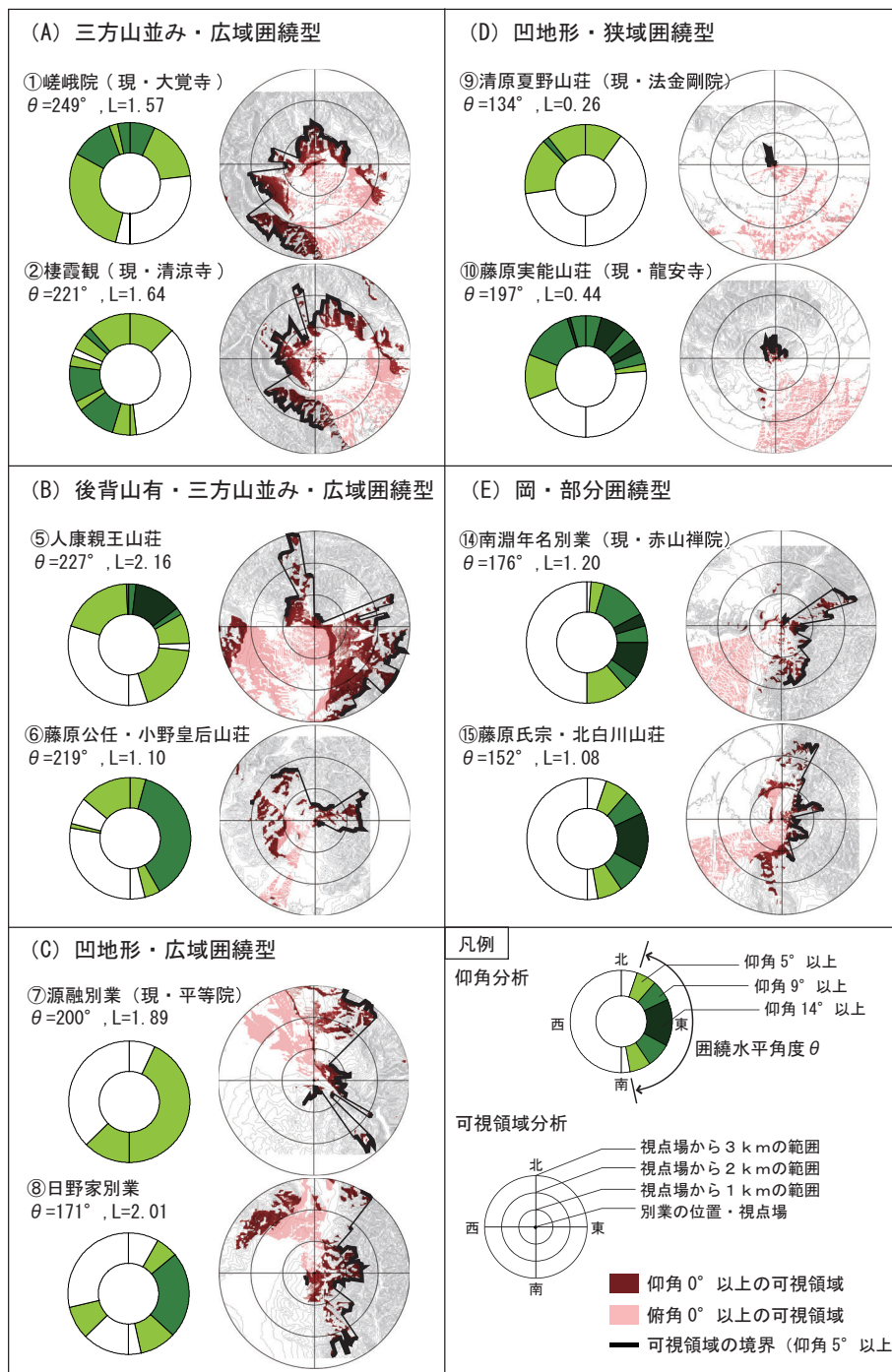
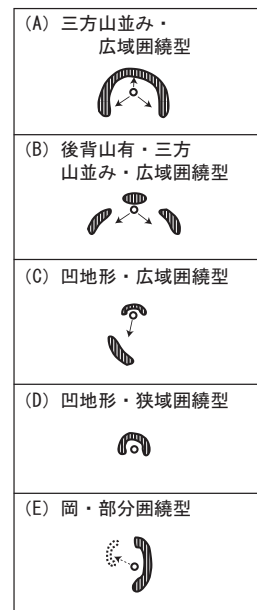


図5 地形圍繞による景観特性の分類



圍繞の型	別業名 (現在)	圍繞距離 L (km)	圍繞角度 θ	俯瞰角度
A	①嵯峨院 (現・大覚寺)	1.57	249°	45°
	②棲霞観 (現・清涼寺)	1.64	221°	48°
	③藤原定家山荘 (現・廐籠庵)	1.51	237°	64°
	④藤原良房山荘	1.56	149°	74°
B	⑤人康親王山荘	2.16	227°	68°
	⑥藤原公任・小野皇后山荘	1.10	219°	18°
C	⑦宇治・源融別業 (現・平等院)	1.89	200°	36°
	⑧日野家別業	2.01	171°	24°
D	⑨清原夏野山荘 (現・法金剛院)	0.26	134°	106°
	⑩藤原実能山荘 (現・龍安寺)	0.44	197°	88°
	⑪仲資王別業 (現・鹿苑寺金閣)	1.04	182°	76°
	⑫藤原関雄山荘	0.68	207°	65°
E	⑬富家殿 藤原忠実別業	1.19	188°	64°
	⑭南淵年名別業 (現・赤山禅院)	1.20	176°	53°
	⑮北白川山荘 藤原氏宗別業	1.08	152°	33°

大きく3つに分かれて分布した。著しく狭域か、著しく広域である場合には役に立つ指標であることが分かる。仰角の分析とあわせて、可視範囲の分布を見ると(図5)、別業では空間の閉鎖性が強かったことがわかる。ただし、可視領域の分布形態が様々に異なり、平均値では考察しきれないため、これについては次章で考察する。

(3) 可視範囲からみた眺望性

眺望の良さを明らかにするために、別業からみた俯瞰景の可視分布を調べる。圍繞の可視範囲がほぼ距離3km以内であったため、距離3kmの地点での俯瞰景の有無を調べた結果、対象とした全ての別業で俯瞰景が得られ、可視範囲の水平角度の平均は57.5°であった。この結果から、別業では、圍繞性が強いだけでなく、眺望にも優れていることが分かった。これは、『作庭記』(平安時代)の著者とされる橘俊綱が、平安時代の名園の条件として、地形上の変化と眺望を挙げていることから裏付けられる。貴族らの別業のほとんどは、山と平野の接点である、野に造営された。野を選んだのは、眺望の得やすさが関係しているように考えられる。

4. 地形圍繞の景観特性とその分類

(1) 圍繞のタイプの分類とその特徴

前節までの各項目の分析結果の結果をふまえ、主に可視領域の分布形態と周囲の地形条件をもとに、別業における地形圍繞を分類した結果、以下の5つに類別できた。

(A) 三方山並み・広域圍繞型

1~3km程度の距離(平均L=約1.57km)を保ちながら、 θ =約240°で三方を中距離景の山並みに圍繞されている。この広域の山並み圍繞によって、閉鎖的な領域を形成しながら、雄大で、のびのびとしたランドスケープが広がっているのが、平安時代の別業周辺の景観の一つの特徴である。嵯峨野には、このような圍繞特性を持つ別業が多く立地していた。

(B) 後背山有・三方山並み・広域圍繞型

2~400m程度の距離で後背山をもち、抛り所を確保しながら、さらにその左右に1~3km程度の距離を保ち、三方を中距離景の山並みに圍繞されていた。近距離の後背山と中距離の山並みによる、複合的な圍繞である。

(C) 凹地形・広域圍繞型

凹地形の中に立地し、狭域に圍繞され、1~3km程度の中距離景の山並みに圍繞されている。近距離の凹地形と中距離の山並みによる複合的な圍繞である。

以上に述べた(A)~(C)のような圍繞の型は、前章で述べたような、領域感覚を得ながら周囲の山を眺めるのに最適な地勢である。

(D) 凹地形・狭域圍繞型

凹地形の中に立地し、200m~1kmの距離(平均L=約720m)という、(A)~(C)と比較すると近距離の山並みの

みに圍繞され、小規模でまとまりのある領域を形成し、さらに前方に眺望が開けていたことが特徴である。前章で述べたような、身近な山の景色と、俯瞰景を同時に楽しむことのできる、優れた視点場領域が形成されていた。

(E) 岡による部分圍繞型

(A)~(D)では、周囲の山並みが閉鎖空間をつくる境界要素としてはたらいっていた。(E)は、仰角5°以上の範囲 θ が他の型に比べて小さいものの、部分的に低い山や岡が視界を遮ることで、可視範囲を限定し、まとまりのある領域を形成している。実際には、氷室山(13)や吉田山(14)(15)が可視範囲を限定し、境界として機能していたことが分かった。

5. 結論

本研究の結論は以下のようにまとめられる。

- 1) 『平安京提要』をもとに立地の特定できた別業を対象とし、山・地形による圍繞性を検証した。その結果、当時、別業では、周囲の山水を取り込んだ非常に規模の大きい景観が評価されていたことが分かり、実際に、視対象としての山による圍繞性が大きかったことが分かった。別業の造営には、この圍繞性が重視されていた可能性が示唆された。
- 2) 可視領域分析の結果、別業周辺では、山や岡が境界となり、一つの閉鎖的空間が視覚的に形成されていたことが分かった。そこでは、都とは異なる幽閑さ、山里の景観が評価されていた。地形による圍繞の仕方によって、広域圍繞や狭域圍繞、後背山を持つもの、凹地形を利用したもの、岡による圍繞など、様々なタイプの空間が生み出されていることがわかった。
- 3) 別業は、圍繞性だけでなく、眺望性にも優れていることが分かった。庭園を中心とする身体に近い景色と、周囲の山や都の眺望を中心とする中・遠景の、両者を平安貴族らは楽しんでいた。これを可能にするような特定の地勢を選び、別業を造営した可能性が示唆された。

謝辞

本研究にあたり、広島工業大学環境学部樋口忠彦教授には貴重なご指導を賜りました。ここに感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 古代学協会ら編：平安京提要、角川書店、1994
- 2) 樋口忠彦：景観の構造、技報堂、1975
- 3) 斎藤潮ら：地形的圍繞の認識と空間規模との関係に関する研究、港湾技術研究所報告31-2、p107-144、1992
- 4) 今野久子・堀繁：山間部に立地する城下町の領域空間の特性に関する研究、都市計画論文集33、p685-690、1998
- 5,7) 本朝文粹 卷九、小島憲之校注：懐風藻・文華秀麗集・本朝文粹、岩波書店、1964
- 6) 紫式部著、阿部秋生訳：源氏物語5、椎本、小学館、1997
- 8) 岡一男訳：大鏡・増鏡、筑摩書房、1975
- 9) 小学館国語辞典編集部ら：日本国語大辞典13、小学館、2001
- 10) 古橋信孝：平安京の都市生活と郊外、吉川弘文館、1998
- 11) 前掲 景観の構造
- 12) 高橋研究室：かたちのデータファイル、彰国社、1984